

# 令和7年度版教科書 「中学社会 地理的分野」

## 学びと指導によりそう教科書

### 新しい時代を担う主権者を育てる教科書

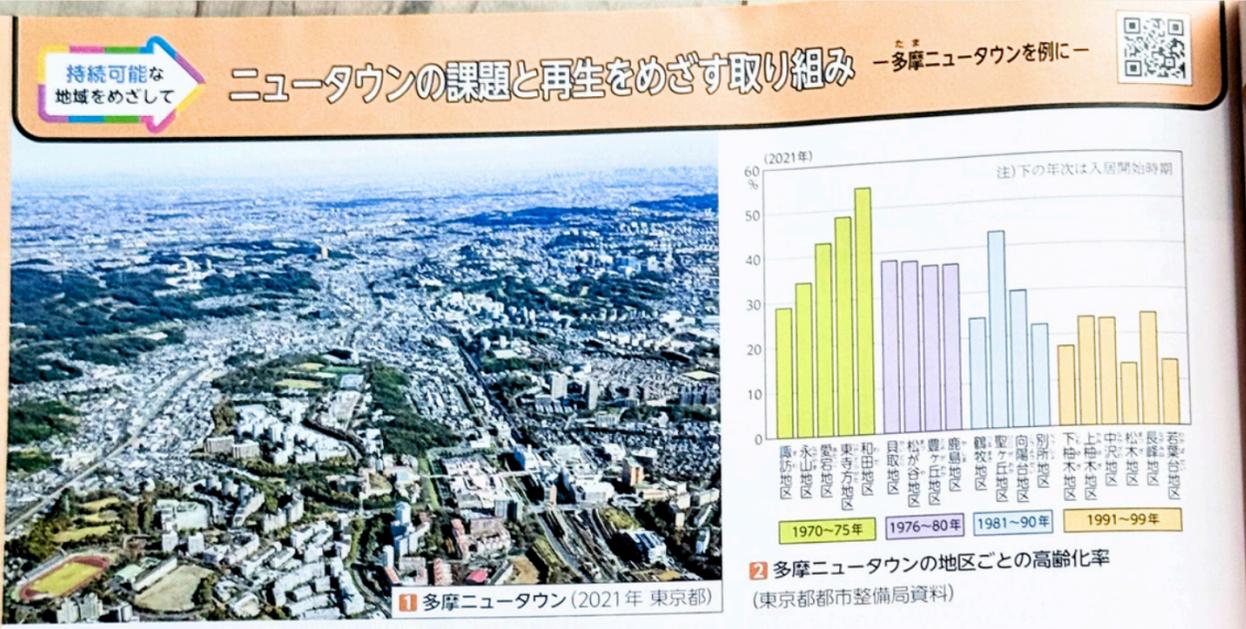
持続可能な社会や災害・防災、社会参画に関する教材を各所に掲載し、よりよい未来を切り拓く力を身につけられるように工夫しています。

### 先生・生徒がわくわくする楽しい教科書

最新のトピックや伝統・文化、環境などに関する様々な教材を掲載し、地理的事象の理解を深められるようにするとともに、学習内容に関心が持てるように工夫しています。



「持続可能な地域をめざして ～ニュータウンの課題と再生をめざす取り組み～」



多摩ニュータウンに住む 瀧口さんの話

私は9歳から19歳まで多摩ニュータウンに住んでいました。その後、東京の都心へ引っ越しましたが、故郷で子育てをしたいと思い、10年ほど前に戻ってきました。今は実家をリフォームした家に住んでいます。私が以前住んでいたころ、多摩ニュータウンには子どもがたくさんいて、地区ごとの祭りにもぎわっていました。しかし、今は当時より子どもが減り、小学校・中学校の統廃合が進みました。2021年に多摩市が50周年をむかえたとき、市民が参加できるさまざまな企画を考えました。このようなイベントを通して地域が盛り上がるとうれしいです。

関東地方の郊外には、多くのニュータウンがあります。東京都南西部の八王子市、町田市、多摩市、稲城市にまたがる多摩ニュータウンは、日本最大級のニュータウンです。主に東京の都心やその周辺に通勤する人々のためにつくられました。1965年に開発が始まり、一戸建てやマンションなどの住宅のほか、商業施設や大学なども建設されました。また、多摩センター駅を中心とした広域的な交通網が整備されて、複数の鉄道路線で東京の都心と結ばれています。

多摩ニュータウンの開発は長期間にわたって続けられました。初期に開発されて人々の入居が始まった地区では、住民の高齢化が進んでいます。また、若い人が進学・就職などによってニュータウンから転出することで高齢化が加速するとともに、人口が減少する地区が増えています。そのため、駅の周辺にさまざまな

施設をつくったり、住宅を新しく建てかえたりすることで若い世代の人々をよびこみ、ニュータウンの再生をめざす取り組みが進められています。また、多摩ニュータウンに隣接する相模原市に、リニア中央新幹線の駅がつけられる予定になっており、東京の都心や名古屋大都市圏・京阪神大都市圏への移動が便利になることが期待されています。

郊外に建設されたニュータウンに住む人々は、都心への通勤・通学に、はげしく混雑した鉄道や道路を使っていました。新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、インターネットを利用して自宅で仕事をするしくみが普及したこともあり、通勤・通学のような変化もみられます。しかし、現在も多くの人が長い時間をかけて郊外から都心へと通勤・通学を続けています。

ニュータウンが直面する「構造的課題」(背景)

1965年に開発が始まった日本最大級の多摩ニュータウン(八王子市、町田市、多摩市、稲城市)では、長期にわたる開発の歴史がある。特に初期に開発された地区では、住民の高齢化が進行している。進学や就職による若者の転出が重なり、高齢化の加速と人口減少、それに伴う施設の統廃合が深刻な課題となっている。

課題解決に向けた「ハード面」の再生

施設の建設や住宅の建て替えを行うことで、若い世代を呼び込む取り組みが進められている。新型コロナウイルスの影響によるテレワークの普及など、働き方や暮らし方の変化も起きている。

瀧口寿彦氏の取り組み「ソフト面(市民参加)」による再生のモデルケース

当事者としてのUターン：  
ニュータウンで育った瀧口氏は、故郷での子育てを希望し、実家をリフォームしてUターンした当事者である。

地域の変化への直面：  
かつての子どもが多く祭りでにぎわっていた時代を知る立場から、現在の子どもの減少や学校統廃合といったリアルな課題に向き合っている。

市民参加型プロジェクトの実践：  
2021年の多摩市50周年を機に、市民が主体となって参加できる様々な企画を立案・実行し、「イベントを通して地域が盛り上がること」の価値を次世代(中学生)に提示している。

# QRコードの動画内容要約



## 多摩ニュータウンの誕生と特徴（過去の誇り）

1965年に建設が始まった日本最大規模のニュータウンであり、複数の市にまたがる巨大都市であることの紹介。豊富な公園や「歩車分離」など、子育て世代が安全に暮らせる画期的な街づくりであったことが解説。

## 瀧口さんの原体験と「文化」の萌芽（当時の熱量）

子ども時代を過ごした瀧口さんが登場し、「遊ぶ天国みたいな街だった」と当時の熱量を語っています。最も重要な点として、単に施設が良かっただけでなく「みんなでお祭りをつくろう、文化をつくろう」というイベントが多くて楽しかったと、「市民による文化創出」の原点をご自身の言葉で伝えています。

## 50年後の現在地「高齢化と再生」（現在の課題）

建設から50年以上が経過し、子どもたちの独立による高齢化と人口減少が「全国のニュータウン共通の深刻な問題」として提起されています。ハード面（建物の建て替えや現代風のリノベーション）で若い世代を呼び込む取り組みが紹介。

## 多世代が混ざり合う「新たな文化」への兆し（未来への解決策）

再び瀧口さんが登場し、団地育ちではない若者が「団地の文化」に惹かれて移住し、商店街で事業やイベントを始めている現象を紹介。「若い人たちと高齢の人たちが少しずつ混ざり合うイベント」が生まれていること、そして瀧口さん自身が子育てを機に団地に戻り、多摩市50周年の実行委員長としてニュータウン再生に取り組んでいる姿が、未来への希望として描かれています。